

SONRISA

そんりさ vol. 187



蜂起 30 周年記念集会の会場ドローレス・イダルゴの入り口

(Chiapas Paralelo、2024 年 1 月 14 日)

蜂起から三〇年、

サパティスタ運動の現在

02	蜂起から 30 年、サパティスタ運動の現在	……小林	致広
06	メキシコ・ナルコ回廊—番外編	……山本	昭代
09	回想のラテンアメリカ ベネズエラからコスタリカへ	……唐澤	秀子
11	ペルー音楽 ラテンアメリカにおけるフェミニズムを めぐる歌の旅 (4)	……水口	良樹
13	ラ米百景 グアテマラに「民主の春」	……伊高	浩昭
14	ムネちゃんの LA 情報拾い読み・斜め読み	……小林	致広

2024 年 2 月 18 日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

サパティスタ蜂起 30 周年記念集会

2023 年 12 月 30 日から 2024 年 1 月 2 日にかけて、チアパス州オコシンゴ行政区のカラコル 8 があるドローレス・イダルゴで、1994 年 1 月の EZLN 蜂起 30 周年を記念する集会が開かれた。カンポ・グランデという旧大農園跡の一角に位置するサパティスタ共同体ドローレス・イダルゴは、1994 年にサパティスタたちが取り戻した土地で、2019 年 8 月に新設された 7 つのカラコルの一つである。4 日間の集会には、支持基盤メンバー、国内外のサパティスタ運動に連帯する人々など、約 1.2 万人が参集したという。

30 日の午前中は、サッカー場が複数とれる広大な広場でカラコル対抗のバスケット、バレーボール、サッカーの試合などが行われた。昼からはサパティスタ共同体の闘いの歴史を表現した演劇が上演された。同時に、資本主義という怪獣ヒドラによってもたらされている生活や環境破壊に対する抵抗運動なども紹介された。

サパティスタが抵抗しているのは、AMLO 政権が推進するユカタン半島のマヤ鉄道やテワンテペック地峡部の両洋連結鉄道といった大規模開発計画、植林事業を装った『生命を植える (sembrando vida)』という似非環境保全事業による共同体の破壊だけではない。近年チアパス州各地で顕著な形で展開している準軍事組織・犯罪組織の暴力に対する抵抗についても、数百人の子どもや若者たちのパフォーマンスによって紹介された。当然ながら、夕刻からは恒例の踊りの時間となった。

31 日も様々な文化イベントが行われ、カラコルのグループごとに、それぞれの闘争の歴史に関する劇などを上演していった。チアパス高地のカラコル 2 (オベンティク) から来たグループは、1994 年のアグアスカリエンテスの誕生と最初の自治行政区に関して、巨大な横断幕で当時の反乱領域を示しながら上演した。約 10km 東のカラコル 9 (ヌエボ・ヘルサレン) から来たグループは、蜂起以前の大農園主の圧政への抵抗、武装蜂起から自治実践にいたる闘いの歴史を演じた。

夜の 10 時頃、約 1,500 名の民兵の閲兵式が行われ、広場の中心部では、若い女性民兵たちがクンビアやスカのリズムで縦横無尽に踊りまわった。



副司令モイセスの演説、壇上の最前列に不在者の席、下には亡くなったサパティスタの遺影 (Noticias de abajo ml, 2024/1/1)

新年になる直前、モイセス副司令官がまず地元参加者のためにツェルタル語で 30 分、その後で一般参加者のためにスペイン語で挨拶した。演説では、「所有権は人々が共有するものであり、人々は自ら統治すべきである」という基本理念に基づき、破壊的な資本主義に抵抗する闘いを組織し、自治、土地と自由を言葉だけでなく実際に獲得する必要性が強調された。2023 年 10 月にガレアーノ副司令 (2014 年 5 月マルコス副司令から改名) から格下げになったマルコス隊長は演壇最後列の長椅子でパイプをくゆらすだけで発言はなかった。

1 月 1 日も、演壇では詩の朗読や芝居、演奏が行われ、広場では多様なパフォーマンスが展開された。会場警備の任務を担ったサパティスタ支持基盤の子どもたち、ポップコーン部隊 (palomitas) のメンバーは、広場で自転車を乗り回していた。夕刻には演壇前に巨大スクリーンが張られ、2021 年 5 月 9 日に欧州にヨットのラ・モンターニャ号で派遣された 421 部隊のドキュメント映画『ラ・モンターニャ』の上映が行われた。



両洋連結鉄道、マヤ鉄道の環境破壊告発パフォーマンス (Noticias de abajo ml, 2024/1/1)

この日のパフォーマンスにおいては、「土地は誰のものでもない、皆のものである (La tierra no es de nadie, la tierra es de todos)」、「ともに分かち合う生活 (vida común)」、「すべてを皆のために、我々は何もいらない (Para todos todo, nada para nosotros)」、「生命を守る闘い、母なる自然の防衛 (Lucha por la vida, la defensa de madre naturaleza)」などのサパティスタ運動の基本理念とされるスローガンを明記したプラカードを手にした若者が広場を行進する形態のものが多かった。その中には 2023 年 11 月のコミュニケで告知されていたサパティスタ領域における新しい自治体制の在り方や理念を謳ったプラカードなどもあった。

サパティスタ領域における自治統治の再編

2003 年のカラコル発足から制度化されていた善き統治評議会 (Junta de Buen Gobierno、JBG) とサパティスタ反乱行政区 (Municipio Autónomo Rebelde Zapatista, MAREZ) を廃止することは、EZLN 創設 (1983 年 11 月 17 日) 40 周年を控えた 2023 年 11 月 5 日のコミュニケで表明された。その 1 週間後のコミュニケで、新しく構築される自治統治体制に関する報告があった。

新しい自治統治体制の基礎単位として位置づけられているのが地区自治政府 (Gobierno Autónomo Local, GAL) である。GAL はサパティスタ支持基盤のメンバーが暮らす共同体 (集落、小農場、共同体、パラヘ、バリオ、エヒード、コロニアなど様々な名称) ごとに組織され、最高意思決定機関は住民集会 (asamblea) であり、運営・調整には選出された委員 (agente/comisariado) が携わる。GAL が担うのは、自治学校や診療所の運営、近隣の非サパティスタの集落との関係調整、適切な資金運営などである。従来の MAREZ は 30 ほどだったが、GAL は千単位で存在するという。

保健衛生 (予防、技能実習など)、教育文化 (識字教育、スポーツ大会、祝祭など)、農業、司法、商業など諸事案の発生や必要に応じて、GAL はサパティスタ自治政府コレクティブ (Colectivo de Gobierno Autónomo Zapatista, CGAZ) の場で討論し、方針を決める。CGAZ は GAL 単位で選出された調整役で構成され、CGAZ の会合を呼びかける執行部はあるが、JBG メンバーのような当局者ではない。これまで 12 の JBG があったが、CGAZ は百単位で存在するという。

CGAZ の要請に応じて、カラコル管区単位でサ



会場を警備しながら自転車で駆けまわるポップコーン部隊



パフォーマンス後にマルコス隊長と話すベロニカ



「土地は誰のものでもない、皆のものである」、「生命を守る闘い、母なる自然の防衛」、「教育」



「共同 (Común)」という基本理念が記されたプラカード
左から、共同体 (C)、組織 (O)、母なる大地 (M)、団結 (U)、新しい (N)

(Noticias de abajo ml, 2024/1/1)



新旧の自治体制の差異

パティスタ自治政府コレクティボ集会 (Asamblea de CGAZ, ACGAZ) が召集されるという。集会の場所は基本的にはカラコルだが、CGAZ のある場所で持ち回り開催されることもあるという。

新しい自治統治体制では、自治統治を担う主体はサパティスタ支持基盤がある集落に組織される GAL である。従来の JBG=MAREZ 体制では、ピラミッド状の自治統治体制の頂上に、各 MAREZ から選出された代議員で構成される JBG が上位当局者となっていた。それは「人々の命令に基づいて統治する (mandar obedeciendo)」というサパティスタの行動原理は、JBG=MAREZ 体制というピラミッド状構造と基本的に相いれないものだった。上意下達という指揮命令系統が優先される軍事面では有効だが、民生面では不適切であり、当局者と人々を分断するピラミッド構造を倒立させることが試みられている。

2003 年の JBG=MAREZ 体制の発足以降、自治統治の実践の過程で様々な問題が発生していた。そのことは 2013・14 年のエスクエリータで配布された教科書でも、JBG 評議員や MAREZ 運営委員など当局者の確保の難しさ、輪番制による当局者の責任欠如、当局者への女性参加率の低さ、MAREZ 間の役割分担や経済資源分配の問題などが指摘されていた。支持基盤からのメンバー離脱、MAREZ や JBG の運営不備などで、MAREZ の統合再編は頻繁に起き、MAREZ の名称、本拠、管区、帰属する JBG が変わらなかったのは、旧カラコルがあった 5 つを除くとわずかしかない。

2019 年からの自治統治体制の再構築

2019 年 2 月 19 日のサミル・フローレス殺害 (モレロス州ガスパイプライン建設反対運動指導者) を受け 3 月から始まったキャンペーン「サミルは生きている」が終了した 8 月 17 日、「包囲網を打ち破る」と題したコミュニケで、7 つのカラコルと 4 つの MAREZ の新設が発表された。包囲網とは、国家警備隊 (Guardia Nacional、州 18 カ所、約 5,400 人) 駐留による軍事化 (国軍、海兵隊を含め約 1.6 万人)、パレンケ=サンクリストバル高速道路建設や「生命を植えよう」などの農村社会支援計画を装った反乱鎮圧キャンペーンによるものである。既存のカラコルと MAREZ を合わせた 43 カ所はサパティスタ自治抵抗反乱センター (Centro de Resistencia Autónoma y Rebeldía Zapatista, CRAREZ) とされた。



GAL や CGAZ のもとでのジェンダー平等性を謳う

(Noticias de abajo ml, 2024/1/1)

サパティスタ関係の集会の場となってきたサンクリストバル市北郊の統合的育成先住民センター・大地大学のカラコル 7 (ハシント・カネック) はチアパス高地の東部、パンアメリカン高速道路沿いのアマテナンゴ行政区トゥランカウ (Tulan Ka'u) のカラコル 11 は新設 MAREZ「意識を植えよう (Sembrando Conciencia)」の本拠でもありチアパス高地の南部に対応する。オコシンゴ行政区主邑に近いカラコル 8 (主邑東 30km)、カラコル 9 (主邑東約 40 km)、カラコル 10 (パトリア・ヌエバ、主邑北 3 km) は、広大な「取り戻した土地」にあり、診療所、農業研修所、共同売店、学校、広場も整備されている。オコシンゴ行政区南東部のカラコル 6 (ラ・ウニオン) はカラコル 1 (ラ・レアリダー) だけだった南部密林地域の東部、北部低地のティラ行政区のカラコル 12 (ホルハ) はカラコル 5 (ロベルト・バリオス) だけだった北部低地の西部を管轄する。

新設されたカラコルは、2020 年 2 月の EZLN-CNI などが呼びかけた「領域と母なる大地防衛、サミルは私たち」キャンペーンの会場となっていた。しかしその 1 か月後には、Covid-19 に対応するため、すべてのカラコルの閉鎖が宣言された。しかし、2020 年 3 月 8 日の「国際女性の日」の動員、2021 年 2 月の「生命のため、巨大開発反対、同志サミル・フローレスのため」キャンペーン会場として使われ、抵抗の拠点として機能していた。



MAREZ ルシオ・カバニャスの CRAREZ 看板



パトリア・ヌエバの CRAREZ 看板
(<https://revistacaliban.net/2020/3/28>)

継続するサパティスタ共同体への攻撃

EZLN や CNI の代表団欧州派遣「生命のための横断 (Travesía por la vida)」があった 2021 年はサパティスタ共同体への攻撃が激化した年でもあった。派遣団が出発した 9 月 14 日の 1 週間後、EZLN は「チアパスは内戦の直前」という警告を発した。

具体的には、オコシンゴ行政区の準軍事組織オコシンゴ・コーヒー生産者地域組織 (ORCAO) による執拗な武力攻撃、チアパス高地のアルダマ行政区の先住民共同体に対する隣接するサンタ・マルタの武装集団の攻撃やパンテロー行政区のナルコと結びついた地域ボスの暴力支配による住民の強制離村などが挙げられていた。2022 年になると、グアテマラ国境に近い山岳地帯のチコムセルコ、フロンテラ・コマラパ行政区などで、シナロアカルテルとハリスコ新世代カルテルの勢力争いが始まり、ナルコの恐怖支配から逃れる大規模な離村 (2023 年は少なくとも 3,500 人) が起きだした。

2023 年 11 月 12 日の新自治体制の発足宣言はこうした「内戦」状態に対応する措置でもあった。宣言直後の 11 月 13 日、地元ボスの準軍事組織と住民の自主防衛組織の対立で 7 月から国家警備隊が駐留するパンテロー行政区のサパティスタ共同体では、カラコル 7 (ハシント・カネック) 管区に属する GAL の看板が掲げられていた。一方、アルダマ行政区の旧 MAREZ マグダレナ・デラ・パス事務所には CGAZ の看板、サンペドロ・コツィルナムには GAL が掲げられていた。カラコル 10 のパトリア・ヌエバでは、解放の神学系の「生命と領域防衛運動」(MODEVITE) の 10 周年集会が 11 月 24 日に開催されたが、そこには GAL、CGAZ、ACGAZ の看板が設置されていた。



パンテロー行政区の GAL の看板 (Chiapas Paralelo, 2023/11/12)



カラコル 2 管区のマグダレナ・デラ・パスの CGAZ の看板とサンペドロ・コツィルナムの GAL の看板 (La Jornada, 2023/11/17; Heraldo de Chiapas, 2023/12/30)



パトリア・ヌエバに設置された看板、左から CGAZ (抵抗地域)、GAL (エヒード)、ACGAZ (パトリア・ヌエバ管区) (Facebook de MODEVITE, 2024/2/7)

パトリア・ヌエバ管区のサパティスタ共同体は、今世紀になって ORCAO の攻撃を受け続けている。その代表例が、パトリア・ヌエバの西に位置するモイセス・ガンディ地域である。モイセス・ガンディは、1994 年の蜂起直後に「取り戻された土地」約 1,400ha に創られた共同体で、当初はサパティスタと ORCAO の家族が共住し、カラコル 4 (モレリア) 管区のチェ・ゲバラ自治区の本拠地だった。2000 年、共有地の個別分譲を要求する ORCAO 家族が南のクシュルハーに移住したため、モイセス・ガンディはサパティスタだけの共同体となった。

2001 年 10 月のクシュルハーにあったカラコル 4 管区の共同売店の壁面の破壊以降、支持基盤メンバーに対する銃撃、脅迫や誘拐、耕地や作物の破壊など ORCAO の攻撃は執拗に続いた。2020 年 8 月にはクシュルハーのコーヒー集荷場、食堂、売店が襲撃・放火され、2021 年 11 月には自治中学校の教室が焼き討ちされた。2022 年になると、複数のサパティスタ共同体に対して隣接村の ORCAO メンバーによる迫害や銃撃による嫌がらせが始まり、2023 年 5 月と 2024 年 1・2 月には数十家族が離村せざるを得ない状況に置かれた。

30 周年の挨拶で、副司令モイセスは、「取り戻された土地」は「共同の土地、所有者がいない土地」であり、非サパティスタだけでなくかつて敵対していた家族を含め共同で管理・運営すること」を表明していた。実際には、政府の巨大開発に反対の横断幕を設置したサパティスタ支持者が村の開発資金申請に不利になるとして、村当局に拘束され罰金を科されたこともある。AMLO 政権の「生命を植えよう」計画などの援助資金の申請に必要な土地を確保するため、サパティスタ共同体の人々を強制的に追放し土地を奪い取ろうとする策動はつねに存在する。サパティスタは、人々の生活を脅かすこの種の迫害に対して今後も抵抗する姿勢を堅持している。

2023 年 8 月から 9 月初めにかけて、メキシコを訪れた。3 年半ぶりのメキシコは、物価が高騰していてびっくり。日本円が安すぎるせいでもあったが、メキシコ人の友人も、「スーパーに行くと、あっという間にお札が消える」と、嘆いていた。

今回の訪問の第一の目的は、書き上げた『ナルコ回廊をゆく』の本を、お世話になった人たちに贈るつもりだった。メキシコ行きの航空券の予約をした時点では、8 月には出来上がっている予定だった。が、実際は遅筆ゆえまだ完成しておらず。本の代わりに、校正紙の束を持って行き、向こうで仕事をするはめに。

それでも、たくさんの懐かしい人たちと再会でき、また新しい出会いもあった。

懐かしい面々と再会

8 月 30 日は、国連の定める世界行方不明者デー。この日の前後には、メキシコ各地で行方不明者の家族会や支援者らによるイベントが行われていた。メキシコシティのイベロアメリカ大学でのイベントでは、なんとシナロア州ロス・モチスから、あのミルナ・メディーナさんが招待されて来ていた。

「フエルテの追跡する女たちの会」を率いて山野に分け入り、当局をもねじ伏せるほど弁の立つ、たくましい女性だ。遠目に見て、あれ？ 背が低くなった？ と思って声をかけたら、ハンドバッグの中から巨大なハイヒールが出てきて大笑い。もともと大柄なのに、何が何でもハイヒールを履いてエレガントに見せたい人なのだ。

さらにベラクルスからは、ソレシート会のロサリア・カストロさんも。歯科医だったが、息子が恋人とともに行方不明になったことから、現地での活動の中心メンバーのひとりとなった。ソレシート会では、活動資金を得るため寄付された古着を売る店を経営しており、ロサリア



イベロアメリカ大学でのイベント



イベロアメリカ大学で再会した行方不明家族の代表者

さんはその担当もしている。日本から使わないスポーツシャツなどぎっしり詰めた袋を持っていくと、とても喜んでもらえた。

2018 年に来日して講演をしてもらったルシア・ディアスさんとも再会できた。相変わらず、疲れを知らない、エネルギッシュな人だ。ベラクルスでは、海岸沿いの秘密墓地の発掘が新しく始まったが、州警察の動きが悪く、なかなか進まないという。

予算が足りず、パトカーにガソリンを入れられないから行けない、と言われたときには、会から資金を出して給油させた。道が荒れていて行けない、と言われたときには、地元の行政区長に直談判して、すぐに道路を補修させたという。「ただ待っているだけでは、ダメなのよ」とルシアさん。

さらに会のメンバーの中で、家族を支えるために新たに事業を起こしたいという女性のための支援プログラムも始めたという。国際 NGO か

ら資金援助を得て、1人 8000 ペソを貸し付け、1年後に同額を返済してもらい、それをまた次の人に貸し付けるといったもの。食堂を始めたい人はその資金で大鍋などを買い、仕立て屋を始めたい人はミシンなどをかう。これまでのところ、焦げ付きなどはなく、順調だそうだ。

行方不明者家族の抱える問題は、一日も早く戻ってきてほしい、という心理的なものだけではない。働き盛りの配偶者を失い、収入を絶たれた女性たちは、経済的な問題にも自ら立ち向かわなければならないのだ。

暴力の嵐吹きすさぶハリスコへ

イベロアメリカ大学のイベントで知り合った活動家から、ハリスコ州の州都であるグアダラハラにある不明者家族の会を紹介してもらった。北部のモンテレイと並ぶメキシコ第2の都市であるグアダラハラは、かつては平穏で暮らしやすいところだったが、最近では銃撃戦や集団拉致事件などが頻発している。

行方不明者は続出しており、被害者の家族会はたくさんある。だがそのほとんどは、何かイベントがあるときにデモや張り紙をするくらいで、捜索活動を実際に行っているのはひとつしかないという。この地域で活動することの危険さが背景にあるようだ。

紹介してもらったのは、「Corazones Unidos en Búsqueda de Nuestros Tesoros（私達の宝物を探すため心合わせて）」という名前のグループである。そのリーダーのロクサナさんと連絡が取れた。WhatsAppで彼女にメッセージを入れると、ひどくしわがれた声で返事が来た。

その年の5月、ハリスコ州の北部沿岸の街、プエルト・バジャルタで秘密墓地の発掘捜査を行ったところ、現場でカビ毒に感染してしまったという。一緒に発掘作業に行った女性8人のうち7人に症状が出て、喉の痛み、咳、発熱などだけでなく、全身の倦怠感や歩行困難を訴える人もいる。



グアダラハラの街角に貼られた行方不明者を探すポスター

彼女も最初は入院するほどの重症だった。コロナでもインフルエンザでもなく、何が原因かわからなかった。転院して3つ目の病院で、初めて原因がわかったが、3か月たってもまだよくならないという。

気の毒なほど苦しげな声だったので、無理はしないでといったが、3日後に会いましょうということになった。待ち合わせする場所はハリスコ州行方不明者捜索委員会の建物の前だった。そこは行方不明者の登録や照合などを行う政府機関である。

朝10時半過ぎ、ロクサナのほかに女性たちが7人集まってきた。夏休みなので、小学生くらいの子どもも数人、連れられて来ていた。冷房のきいた広い会議室に通され、コーヒーとクッキーまで出された。何が始まるのかわからないまま、ほかの会のメンバーと一緒に座って待っていた。



ひとりの女性は息子の名前と行方不明になった日付を腕に入れ墨していた

担当の女性が挨拶した後、照明が暗くされ、パソコンから写真の投影が始まった。ファイルが開かれるたびに、「この後の写真は、人によってはトラウマを生じることがあるのでご注意ください」という警告が出る。州内で発見された遺体の写真だった。

ロクサナたちは、自分たちで秘密墓地を探し、発掘するが、遺体が入った袋や遺体の一部を見つけたら、その後の作業は検察に委ねなければならない。そのため、せっかく自分たちが見つけた遺体——搜索する会の人々は、それを「宝物」と呼んでいる——を見て、確かめることができない。

誰かの息子や娘かもしれない遺体を、自分たちで確認させてほしい、とロクサナたちが掛け合って、定期的に遺体写真を見るようになったのだそうだ。

ホラー映画すら苦手な私には、目を背けたくなる写真ばかり。ここで書くのも気が引けるが、犯罪組織は遺体の多くを切断する。頭部のみ、手だけ、足だけ…。何のために？ 理由はあってもなくても、ボスが命令するから、組織の新入りはやらざるを得ないのだ。吐き気を催しそうになったが、会の女性たちはすでに何度も見ているからか、とくに反応はない。

身元特定で重要な手がかりになるのが入れ墨だ。花や動物、人の顔、サンタ・ムエルテ、なにかの文章、人の名前など。

耳の後ろの入れ墨を見たとき、女性のひとりが突然、「あっ」と声を上げ、「息子かもしれない」と泣き出した。手の甲にバラの花の入れ墨があるのを見て、「〇〇の息子はこういうのを入れていた、と言ってなかった？」などの会話も。

スライドを見ていたのは1時間弱だったが、永遠のように長く思え、終わって明かりがついたときにはホッとした。建物の外に出ると、地元テレビ局のクルーが待っていた。ロクサナが手配していたのだ。

カビ毒で健康被害を被ったことに関して、メンバーの女性2人が公的な支援が必要だ、と訴

えた。そのうちのひとり、組織に脅されているので、顔も名前も出せない、と後ろ向きで、頭を布で覆ってインタビューに答えていた。後で話を聞くと、グアダハラ周辺部の恐ろしい現状が垣間見えた。

パティと仮に呼ぶ彼女は、息子や甥、計5人が行方不明になっているという。最初は甥のひとりが、組織からの恐喝に抵抗したところ、拉致され行方不明になった。それを探していた別の甥たちや自分の息子も、また次々に行方不明にされてしまった。地元を牛耳っている同じ男が犯人なのはわかっているが、警察は搜索するどころか、犯人に協力して拉致を手伝っているというのだ。

おりから、2024年は、メキシコでは大統領をはじめ国会議員や地方自治体など大規模な選挙が行われる年である。犯罪組織に支配され、国家のコントロールが及ばないこのような地域では、選挙はどのような意味があるのだろうか？ 多額の費用のかかる選挙は、犯罪組織にとっては、政党に浸透する絶好の機会でしかないだろう。せめてパティのような人にこれ以上不幸が及ばないように、犯罪組織の暴力を抑制するような施策が考えられないものだろうか。



地元テレビ局のインタビューに顔を布で覆って後ろ向きで答える「パティ」

ベネズエラ

コロンビアへ戻って少し落ち着いてから、ベネズエラを訪ねました。メヒコで知り合ったり、コロンビアの先住民運動関係で知り合ったりした友人を訪ねていったのです。

ベネズエラとの国境の町までは、いつものように乗り合いバスです。国境が近づいてくると、乗り合わせた乗客の何人かが、セーターやブラウスなどの衣類を、「これを預かってくれ」、「税関で自分のものだと言ってくれ」と頼んでくるのです。

コロンビアでは衣類がとても安く、買い込めるだけ買い込んで、なんとか税関の目をくぐって通り抜けたのだとは、後で分かったことです。そんなこととは分からずに断ると、舌打ちしながらすぐ違う人に同じように頼めば、気安くそれを着込む人もいたり、手に抱えている人もいたり。でもいざ降りてみれば、座席に衣類がそのまま残されている…

国境は隣り合う国との関係がふと見えるところだと改めて思いました。アメリカ合州国とメヒコの国境を通ったとき見た光景、合州国の人間であれば、思うがままに車のトランクに積み込んだ買い物を見せるだけで、どんどん通っていく様子が思い出されます。

ベネズエラのビザは難しいのだよねと、ぼやきながら、国境を越えることができずに、そこで降ろされる人も数人いました。カラカスへ向かう道はすでに夕闇に紛れて、町の光もほとんど見えません。たぶん夜明けくらいに到着したのかもしれませんが、ターミナルの様子はほとんど覚えていません。今回は始めから友人を訪ねる予定だったので、いつものように宿を探す必要がなかったのです。

石油の豊かさを垣間見る

ベネズエラでわたしたちに宿を提供してくれたのは、コロンビアのポパヤンで知り合った先住民の問題にかかわっていたビクトルという大学教員の仲間たちです。かれらは、ビクトルは先住民問題にかかわってボゴタの大学を追われてポパヤン

の大学に行った敬愛する友人だと言って、わたしたちを歓迎してくれたのです。

かれらは30代から40代と思われ、かれらの住居は落ち着いたたたずまいの街にあるきれいなマンションです。道路もきれいに清掃され、行き交うのはほとんど白人系と混血系と思われる中流階級という感じの清潔なみなの人びとです。石油産出から得られる豊かさはこんなところに現れているのだと、実感されます。

わたしたちが入るお店というのは、書籍以外はほとんどが食品関係です。書籍は期待したほど充実した感じがなかったように記憶しています。大きな違いを感じたのは食品です。

素材を売するというより、調理したり加工したりしたものが多く、デパ地下の調理済みの食品売り場を彷彿させるものです。売るためにさまざまに技巧をこらし、見た目も美しく整えられたものが多かったように思い出されます。

とりわけ、魚を調理したものの種類の多さ、見た目もちろん、美味しさもまた格別でした。日本を出て以来、こんなふうに調理された魚を食べた記憶がなくて、酢漬けなどはしめ鯖やコハダのお寿司を思い出させてくれ、ひさしぶりにおいしいお魚料理を楽しみました。

友人たちが車で市内を案内してくれたのですが、豊かさを感じさせる街を通り抜け、郊外へでたところにファベールがありました。日本に帰って何年もたってから、ファベールで子どもたちに学ぶ機会を作るために考えられた「エル・システム」という音楽システムが大成功をおさめているということを知りました。日本でも「エル・システム」の



エル・システムの日本でのコンサート

演奏会があり、聞きに行ったのですが、感慨深いものがありました。

再びコスタリカ

コスタリカの首都サンホセ。最初に通ったときはだれも知る人はいないところでしたが、帰り道の今回は、何人かの尋ねたい人がいました。

各地で知り合いになった人びとからこういう人を訪ねたらいいと、紹介された人びと。著書を読んで会いたいと思った人びと。チリのクーデター後に亡命した人びとへは家族からの伝言を携えて、コロンビアで再会したウカマウ集団のホルへとベアトリスからも家族たちへの伝言をもって。

家族からの伝言を伝えるために会いにいった人たちは、住居も定まりそれなりに落ち着いた生活をされている様子が分かり、ほんとに安堵したことを覚えています。それでも生活を根こそぎ奪われ、追われるということがどんなに過酷なことか、言葉にならない表情が語るものが忘れられません。

こうして人と会ってみると、コスタリカの豊かさ、政情が安定していることが、さまざまな理由で追われた人びとに一定の時間であっても落ち着ける場になっているのだと分かります。

メヒコがスペインの市民戦争のあとフランコに追われた人びとを受け入れたり、ホルやベアトリスのような人びとがボリビアに居られなかったとき近隣の諸国で受け入れられたりしたように、制限はあるにしろ、中南米の諸国で出会った他国の困難にある人びとを受け入れる懐の深さは、

日本国ではどうでしょうか、自分はどのようにふるまえるのだろうか、胸に迫るものがあります。

アフリカ文化の影響に気づく

南米を通してきて、アフリカの文化が強い力を持っていることに、少しずつ気づくようになりました。むごい歴史ですが、南米の植民地化の過程で鉱山採掘などの過酷な仕事に必要な労働力として、奴隷商人の手によってアフリカから人びとが拉致され、売られてきていました。その子孫が中南米で生き延び根付いていったのです。

ペルーでもボリビアでも音楽や踊りに彼らの文化の影響がつよく表れています。そのことにこれまであまり気づかずにはいました。アンデスの先住民の文化のなかにも黒人の姿がみられます。

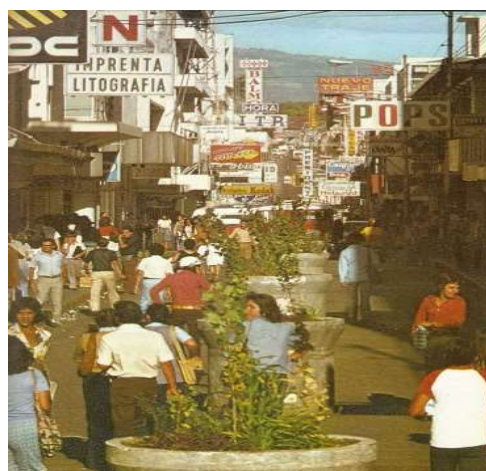
コスタリカで知り合った友人からは、黒人、先住民、そしてクリオージョの三つの文化の混交が

ここの文化なのだと言って、とくにカリブ海に面したリモン地方で採集された民話を読むように勧められたりもしました。

またこんな出会いもありました。日本人の旅行者がこんな書店に何度も来るのは珍しいといつて、さまざまな運動関係の書籍を扱う書店の店主が声をかけてくれました。彼はアメリカ合州国の出身で退職後この国へやってきた。コスタリカは中米では豊かな国で政情も安定しているし、食糧事情も欧米的でくらしやすいところから、彼のように退職後コスタリカへ移住する人は珍しくないと言います。同じような条件の同国人がかたまって暮らしている地域があり、かれも最初はそこに家をさだめた。

しかし、しばらくこの国に暮らすうちに一見豊かで安定しているように見えるけれど、隠れた貧困があることに気が付いたそうです。やはり先住民系の人びと、とりわけ女性たちが困難な暮らしを強いられている。賃金の不払いや性的暴力を含むハラスメントなどにさらされている住み込みで働く家庭内労働者、弱い立場で法的権利など何も知らない女性たちが懸命に生きている現状をみて、自分ができる手助けをしたいと思った。

そんなことを話している間にも、相談に立ち寄ったらしい女性たちが訪れ、相談などしている様子でした。彼は中南米の貧困について、アメリカ合州国が長い間どれほど勝手に相手国の主権を犯してきているか考えると、自分は年金で暮らしている身だから何一つ失うものはないし、合州国の人間という特権的立場にあるのだから、彼女たち、彼らとともに自分が出来るだけのことをして生きていきたいと語ってくれました。



1970年代首都サンホセの街並み

<https://qcostarica.com/costa-rica-photos-san-jose-in-the-70s/>

ラテンアメリカにおけるフェミニズムをめぐる歌の旅 (4)

ラテンアメリカのフェミニズム歌謡を考えるとき、声高にフェミニストとして告発的に歌うだけでなく、一人の女性としての立場から「女性として生きる」ということを問いなおした多くの女性歌手たちがいたことを忘れてはいけなだろう。そして同時にそうした女性たちに寄り添って作品を作った男性たちの存在も。今回は、ラテンアメリカの20世紀半ばから後半期にかけて活躍した大物女性音楽家たちの作品からそういったものを紹介していければと思う。

そもそも、ラテンアメリカにおいて、楽器を演奏するということが自体が男性のものであり、女性が楽器を演奏するということに対するハードルはかなり高かった（これは今でも一部地域や世代に強く残っている）。踊りも男性が女性装をして踊るということも長くあった。こうした領域に女性が進出していく、ということ自体が一つ闘いであり、男装をして演奏に参入した女性音楽家などもいた。

他方、女性が歌うことに対するハードルは比較的低かったため、女性の進出はまず歌から始まった。やがてこうした女性たちの中から、自ら作曲に携わる女性たちが登場する。

ペルーでは、20世紀前半期に活躍したロサ・メルセデス・デ・アヤルサやセラフィナ・キンテラスが広く知られた民衆音楽の初期女性作曲家としてあげられる。彼女らはともに男性中心主義が色濃いリマの民衆音楽ムシカ・クリオージャの作曲家であった。

ロサ・メルセデスは、ピアノを弾き、1930年代には市民劇場でムシカ・クリオージャの第一回音楽フェスティバルで指揮も振っている。またアフロペルーの再評価を20世紀前半期に行い、現在最も有名なアフロペルーのレパートリーとなっている「トロ・マタ」のもっとも古いバージョンを記録、公演で演奏したり、アフロ系子孫によって主に営まれていた行商人の物売り歌（プレゴンという）を採取、歌曲化したことでも知られている。

もっとも彼女の「トロ・マタ」は、アフロ色が薄められたラメント形式になっていたといい、20世紀半ば以降のアフロ文化復興運動によって



セラフィナ・キンテラス『壊れた人形』

意識的によりアフロ性を前景化させた新しい伝統の創造とは違うものとなっていたようだ。

また、一世代下に位置するセラフィナは、「壊れた人形」や「トード・イ・ナダ」などの曲で知られている作曲家であるだけでなく、従姉妹と二人でデュオとしてギターとピアノで音楽活動し、また詩人や脚本家としても活動していた。さらにペルー作家作曲家協会の創設者の一人でもあった。

こうした女性シンガーソングライターたちによるこの時代のレパートリーでは、特に女性性を意識的に前景化させた作品はまだ少なく、恋愛を扱った作品政治的なテーマの作品などの中に、そういった生きづらさや悲しみという形で表現されることが多いようだ。

20世紀半ば以降、アメリカのフォークリバイバル運動と時を同じくしてラテンアメリカで新しく起こった「新しい歌」運動の先駆けであったチリのビオレタ・パラは、貧しい生まれ、美しくない声というコンプレックス、そしてあらゆる関心事に全力で生きるという時代の流れに添わない行動力で、農村地域の音楽を採集、ラジオで紹介することで知名度を得て、ヨーロッパとチリを往復しながら活動を活発化させていった。

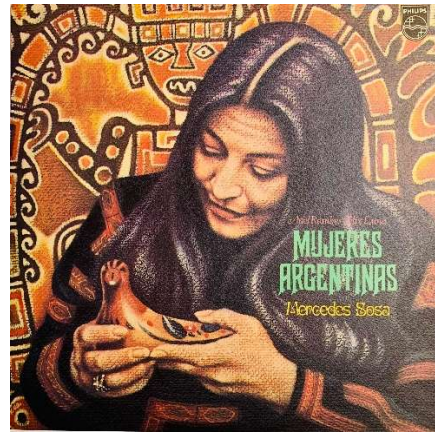
そんな彼女の自作曲の中には、女性であることの苦しみ、結婚という牢獄、フェミサイドを許容する社会への怒りが時に顔をのぞかせている。特に彼女がデシマ（十行詩）で書いた自伝に明らかだ。しかし、男に乞わず、自分の心の声のままに生きることを選ぶことで多くの評価と悪

評にさらされ、絶望を深めていった末にピストル自殺（1967 年）という悲しい選択に行き着いてしまった。こうした彼女の苦悩については、SNS のバッシングが日常化した現代的な心労と相通じるところが会ったようにも思う。それもおそらく、女性であったことがより拍車をかけたのではなかったろうか。

また、アルゼンチンを代表する民謡歌手であり、新しい歌の顔でもあったメルセデス・ソーサも 1969 年に『アルヘンティーナの女』というアルバムを出し、アルゼンチンの歴史に名を残した女性たちに捧げられた曲を歌っている。その中には 20 世紀初頭に活躍し入水自殺したアルゼンチンの女性詩人アルフォンシーナ・ストルニイに捧げられた名曲「アルフォンシーナと海」や、アルゼンチンの識字教育で名を残したロサリオ・ベラを歌った曲などが含まれている。

またこのような歴史記憶された女性たちだけでなく、チャコ地方で、先住民集落で、ブエノスアイレスで生きたさまざまな女性たちを歌った作品もともに歌われているのがこのアルバムの魅力的なところでもある。第二次フェミニズムの時代、フェリックス・ルナの詩とアリエル・ラミレスの曲によるこのアルバムがどういう経緯で作られたのかは気になるところであるが、残念ながら今回はそこまで追いかける余裕がなかった。いつかまたもう少し掘り下げられたらと思う。

ペルーの沿岸部では、上流階級出身でありながらサロンをバリオの人々や文人たちに開放し、ムシカ・クリオージャを新たな視点で刷新したチャブーカ・グランダが、シンガーソングライターとして注目を集め、サロンでたくさんの文化人とともに交流しながら作品作りを行っていた。その中には、女性に捧げられた作品が多くこのアルバムに収められている。ビオレタ・パラに捧げられた「灰とアザミ（カルド・オ・セニーサ）」や彼女の母の家のアンデス出身の家政婦アウレリア・カンチャリに捧げられた「ドゥエニョ・アウセンテ（不在の主人）」、さらには彼女の代表作「フローラ・デ・ラ・カネーラ（ニッケの花）」もリマの黒人女性ビクトリア・アングーロに捧げられている。またスサナ・バカが後にチャブーカとの共作として発表した「マリア・ランドー」も他人のために身を粉にして働く貧しき女性たちとしてのマリアの日々が歌い上げられている。



メルセデス・ソーサ『アルヘンティーナの女』

また、アフロ音楽復興運動の立役者の一人であるビクトリア・サンタ・クルスは、カホンバックとしたポエトリー・リーディング「奴らは私にネグラと叫んだ *Me gritaron Negra*」で、アフロ系で女性という二重の差別の中を生きた自身の経験が、差別に苦しんだ青春時代から、それを反転させた解放の表現とした物語として、今なお愛され、再演される作品となっている。

一方、ペルーの北部アンデス歌謡では、ペルーのアンデス・フォルクローレの女王とも呼ばれたパストリータ・ワラシーナがワイノ歌謡の中で「アンデスの女性（ムヘール・アンディーナ）」といった女性をテーマとした作品を歌ったり、名曲「よっぱらい *El borracho*」の曲間に「私は女性組合の者で…」というような台詞が入ったりと、かなり「女性」を意識し、その生きづらさをふまえて声を上げる活動を行っていたことがレパートリーからも見て取れる。

フェミニズム歌謡がよりダイレクトに問題を問題として歌い始める前から、女性には徐々にその存在、苦しみ、違和感、連帯といったテーマを少しずつ歌の中に紛れ込ませ、その声を拡大させてきた。今回紹介できたものは、そのわずかな一端ではあるが、こうした積み重ねが、女性を人とみなさない家父長制的従属／搾取の関係に NO を言うための長い準備と連帯を育んでいたのだらうと改めて思う。

日本社会では、いまだフェミニズムの活動と連帯する誰もが口ずさめる歌が存在しない。しかし日本でも、今回紹介したような曲は本当にたくさん作られている。その一歩先、ダイレクトに問題を問題として考え、共有し、連帯していく作品が日本でも生まれ、歌われるようになってほしいと思う。

グアテマラに「民主の春」再来

グアテマラに長らく縁遠かった「民主の春」が再来した。70年ぶりに吹く春風は冷たく荒ぶれているが、政治改革への希望を孕んでいるのは疑いない。2024年1月15日未明就任したベルナルド・アレーバロ新大統領の前途は茨の道が続くだろう。だが国会で保守・右翼諸党に包囲された少数派の憂き目を政権党が忍耐強い対話によって和らげてゆけば、活路は徐々に開けてくるに違いない。

最初の「春」は、1944年6月にホルヘ・ウビコ將軍13年の独裁政権が打倒された後の同年10月、後継の軍政を倒した「グアテマラ革命」によって訪れた。その年12月この国初の民主選挙で現大統領の実父フアン・ホセ・アレーバロ教育学博士が当選、翌45年3月就任する。51~54年は革命の立役者だったハコボ・アルベンス大佐（前政権国防相）が選挙を経て政権を担う。2代民主政権は遊休地接収による農地改革を遂行、先住民をはじめ貧農らは恩恵を受けた。両政権はまた、マヤ、シンカ、ガリーフナ、ラディーノ（混血）の4民族と白人系を平等に扱う普遍的人道主義政策を試み手掛けた。

だが特に農地改革は、遊休所有地を接収された米国策会社ユナイテッドフルーツ社、その背後にいた同社株主ジョン・ダレス国務長官、その実弟アレン・ダレス中央情報局（CIA）長官を激怒させた。アイゼンハワー米政権はCIA工作を通じて54年6月、反アルベンス派グアテマラ人らの傭兵部隊をホンジュラス西部からグアテマラに侵攻させ、これをCIAが空爆支援、首都グアテマラ市は流血の巷と化した。ウビコ政権打倒から10年後、革命に始まる「グアテマラの春」は軍靴に蹂躪されて潰えた。これはクーデターではなく、米政府による政権破壊である。民主派は59年のキューバ革命に触発されてゲリラ戦を開始。多数の死傷者が出た長期の内戦（1960~96年）の後、圧政や腐敗体制が続いてきた。

現代の主人公ベルナルド・アレーバロは「変革の種を蒔く運動」を意味する「種運動」（MS）を結党し、2023年6月25日の大統領選挙に出馬。劣勢を覆し得票2位で、8月20日の決選進出を決めた。慌てふためいたのが「腐敗の塊」アレハンドロ・ジャマティ（前大統領）だ。「腐敗・無処罰一掃」を掲げるアレーバロは一躍「希望の星」となり、1位で決選に臨む

サンドラ・トーレス（希望国民連合=UNE）に逆転勝利する公算が膨らんでいた。ジャマティは腹心の検察庁長官兼検事総長コンスエロ・ポーラスを焚き付けて6月末、アレーバロとMS党を失格させる陰謀に着手する。

腐敗と無処罰を恣にして権益を長年貪ってきたのがジャマティやポーラスに代表される伝統的保守右翼体制派勢力だった。彼らの懸念は的中しアレーバロは圧勝、次期大統領となる。その日から陰謀に次期正副大統領暗殺やクーデター決行が加えられた。だがCIAが察知、それをジョー・バイデン米大統領が暴き、最悪の策謀は封じ込められた。70年前と全く異なる米政府の対応だった。

しかしジャマティ・ポーラス組の執念は1月14日の就任式当日まで続く。1院制国会の議員160人は4年ごとに全取っ替えされるが、旧議員の3分の2を占めるジャマティ派は国会開会を拒んでいた。旧国会開会、新議員就任、新国会開会、新執行部発足と進まなければ新政権は発足できない。同日15時の大統領就任式の開始予定は遅れるばかりだった。

首都には各国の首脳らが集結していた。米州7カ国首脳、米州諸国機構（OEA）事務総長、欧州連合（EU）外相級高官、米国際開発局（USAID）長官らは連繋し、国会とジャマティに新大統領を就任させるよう圧力をかけた。そして首脳陣ら首席代表の多くがスペイン国王は日程の都合で余儀無くされ、就任式を待たずに帰国の途に就く。

グアテマラは国際社会の前で大恥をかいいたのだが、ついには内外世論に屈したジャマティ派旧議員団は国会開会に追い込まれる。予定時刻から9時間余り遅れた15日未明、新しい議員団と執行部はミゲル・エンヘル・アストゥーリアス文化センター内の大劇場に移り、式典は始まる。コロンビアとホンジュラスの両大統領、ベリーズ首相、OEA総長、台湾外相らは、アレーバロとカリン・エレラ副大統領の就任を見届けた。

アレーバロは就任演説で「グアテマラの民主は（陰謀を打ち破る）抵抗力を備えている」と強調。その後の国家文化宮殿（大統領政庁）バルコニーから憲法広場の大群衆に向けての演説で、亡き父大統領の業績を想起しつつ「新しいグアテマラの春が永続することを」と訴え、腐敗・無処罰退治の公約遵守を誓った。就任の日まで連続105日間も動員を続け陰謀と闘った先住民と、希望を繋ぐ若者層に感謝の意を表することも忘れなかった。

(1) LA 諸国の移民、2023 年も暴力に直面

アメリカ大陸を北上する移民はダリエンの密林を抜け中米を横断し、米国境に行き着くまで危険に満ちた道を歩まなければならない。近年、妊婦、子ども、青少年、LGTBIQ+、慢性疾患の人々、非スペイン語話者の割合が増え、様々な暴力に曝される状況となっている。

2023 年 12 月第 1 週、パナマ移民局はダリエンの密林の横断者数は 50 万を超え、2022 年の 2 倍以上と公表した。メキシコ国立移民研究所が 10 月までに登録した非正規滞在者は、約 58 万人で前年度を 33% も上回っていた。11 月現在、メキシコ難民支援委員会は過去 10 年間で最多の約 13.7 万件の亡命申請を受理していた。

パナマ、中米、メキシコ駐在の国境なき医師団 (MSF) は、「パナマのダリエンでは誘拐、暴行、性暴力、ホンジュラスでは強盗、恐喝、グアテマラでは恐喝や性的虐待、メキシコでは誘拐、拉致などに直面する」状況を目撃してきた。

MSF は 2023 年 1 月から 10 月にかけて約 13 万件の医療相談と約 8 千件のメンタルヘルス相談を提供し、健康増進と支援活動を行なった。主な健康問題は、屋外での睡眠と絶え間ない気候の変化による呼吸器感染症、不潔な水や衛生不備による胃腸疾患、長時間歩行や暴力による外傷や打撲などである。

2023 年 1~10 月の期間、性的暴力への対応は、パナマでは 397 人、ホンジュラスでは 76 件、グアテマラでは 61 件、メキシコでは約 500 件だった。再被害の恐怖などから性被害報告を躊躇するため、未報告事例は膨大な数に及ぶと推測される。移民に対する脅迫、強盗、恐喝、誘拐、拷問、性的暴力などの虐待や人道的対応

における諸機関の怠慢は地域全体で絶え間なく起きていると、MSF 中米地域責任者は語っている。



一日数千人がダリエンを徒歩移動

出典: <https://www.msf.org.co/> 2023 年 12 月 18 日

(2) 先住民指導者への暴力は 2023 年度も顕著

2023 年は LA 諸国の先住民族の領土、共同体、領域を守ろうとする指導者への暴力が激化した年だった。『行方不明者はどこへ』という共同調査報告によると、メキシコでは 2006 年 12 月~2023 年 7 月まで環境や領土の防衛者の行方不明者 96 名中 62 人が先住民族とされる。大半はナワダガヤキ、ミステカ、ウィシャリカ、プレペチャなどもある。鉱業、伐採、組織犯罪が存在する地域で失踪事件が頻発し、家族や共同体に強い影響を与え、強制移住や廃村につながるものが指摘されている。

『アマゾンの管理人』という特別調査では、コロンビア革命軍反体制派が活動する先住民保護区では若者のリクルートが行われ、恐怖支配が行なわれていると報告されている。2023 年 6 月、クラーレ・ロス・イングレセス居留区で先住民指導者クストディオ・ユクナが殺害され、共同体や先住民組織に衝撃と恐怖を与えた。

ペルーでは、11 月 29 日、アマゾン流域プクルパ地域における土地侵略、土地売買、麻薬取引、違法伐採などを糾弾していた先住民指導者キント・イヌマが覆面姿の男たちに待ち伏せされ殺害された。アマゾン地域の環境保護団体が直面する脅威の大きさを明らかにした。

メキシコ・ハリスコ州のマナントラン山地の環境活動家イグニオ・トリニダードは政府の人権擁護者保護メカニズムのもとにあったが拉致され、11 月 24 日に遺体で発見された。この事件は、違法伐採、違法採掘、麻薬密売グループの地域支配が日常的に行われている状況で起きた。

ニカラグアでは先住民が何人も殺害されている。3 月 11 日、ボサワス生物圏保護区の中心部にある先住民マヤングアのウィルー共同体が約 60 人の重武装の非先住民に襲撃され、住民 5 人が死亡、2 人が負傷し、学校と共同体の教会を除くすべての家屋が焼き払われた。この襲撃事件は、森林伐採と違法金採掘の脅威にさらされているボサワス生物圏保護区内での 3 度目の虐殺であった。

出典: <https://es.mongabay.com> 2024 年 1 月 9 日

(3) エクアドル国内は武力紛争状態

1月7日の刑務所暴動と犯罪集団ボスの脱獄、1月9日の武装集団のグアヤキルの放送中のテレビ局占拠や大学などへの侵入を受けて、就任2か月目のノボア大統領は、国が武力紛争状態であると宣言することになった。

2023年、約8千の殺人の7%しか解決できないほど、エクアドルの治安は悪化していた。チョネロス、ロス・ロボス、ロス・ラガルツスなど約20近くの犯罪集団が暗躍し、メキシコやコロンビアの国際麻薬カルテルと結びついたボスたちは刑務所から指令を出している。昨年の大統領選挙期間中に大統領候補フェルナンド・ビジャビセンシオを殺害した犯罪集団は、警察、軍隊、司法、役人や政治家のなかに浸透している。12月の「癌転移」作戦で拘束された29名の中には司法審議会代表がいた。チョネロスのボスのフィト（ホセ・アドルフォ・マシアス）やロス・ロボスのボスの脱獄は6つの刑務所での暴動による警官拘束で可能となった。

ノボアは選挙運動期間中、経済と治安維持を最優先すると主張し、刑務所からの指示が出せないようにするために危険人物の分離収容、海上刑務所の設置などの構想を発表していた。2024年1月から刑務所への麻薬持ち込み禁止など監視活動強化など、強硬姿勢をちらつかせていた最中に暴動、脱走事件が起きたのである。

米国国務省によると、近年のコロンビアから欧米向けのコカインの3分の1はエクアドル経由だという。特にコロンビア和平合意後、旧FARC分派との結びつきを通じて、エクアドルは国際市場の表舞台に登場することになった。コロンビアのナリーニョ、プトマヨ県で活動するFARC分派グループを介して、チョロネスはメキシコのシナロア・カルテル、ロス・ロボス、ロス・ラガルツス、ロス・ティゲロネスなどはハリスコ新世代カルテルと結びついているとされる。欧州市場との関連ではアルバニア系麻

薬カルテルとの関係が強いとされる。国内はこれらの犯罪組織のシマ争奪戦の舞台となっている。



刑務所屋上のフィト支持の落書き

出典: <https://www.bbc.com/mundo/> 2024年1月10日

(4) MAS 分裂とボリビア道路封鎖

「多民族国家の日」の1月22日、ボリビアの社会主義運動(MAS)の指導者、アルセとモラレスは対立したまま記念式典に臨むことになった。現大統領アルセ支持派は公的な祝賀集会に参加したものの、モラレス支持派はボリビアの裁判官を決める司法選挙召集を求め、国内各地の道路を封鎖した。封鎖は全国24カ所におよび、国内の東部と西部を結ぶ主要幹線が切断され、都市部では基本物資不足が起き、約10億ドルの経済的損失をもたらしたとされる。

2009年憲法では、最高裁判所、農業環境裁判所、憲法裁判所、司法評議会の26裁判官は6年ごとに議会の指名を受け、国民投票で選出されることになっている。2023年には議会の指名がなく司法選挙は行われず、憲法裁判所は事態が落ち着くまで現職続投という裁定を下していた。この決定は右派野党やモラレス支持派から異議が出されていた。

議会が司法選挙6月実施を約束したため、モラレス支持派による道路封鎖はカーニバル直前の2月7日で終了することになった。しかし現在の議会はアルセ支持派、モラレス支持派、右派野党の3ブロックに分かれ、3分の2の合意が必要な裁判官候補指名に向けた合意には極めて難しい交渉が必要となり、6月の司法選挙に必要な票の合計に達しない可能性がある。

モラレスをMAS大統領候補にすることを決定した2023年10月のMAS総会は無効、大統領・副大統領任期は2期に限定されるものであるという裁定は、憲法上の職務権限が終了する直前の12月29日に憲法裁判所によって行われた。憲法裁判所判事の交代は、2025年の大統領選挙で4度目の大統領当選を目論んでいるモラレスにとって喫緊の課題となっている。同じことは、2019年のクーデター関与の嫌疑で勾留中のため暫定的交代を命じるという裁定

を下されているサンタクルス州知事のルイス・フェルナンド・カマチョにも当てはまる。



ブロックされた地点

出典: <https://elpais.com/america/> 2024年2月8日

編集後記

前号 186 号の村井友子さんの「2017 年人口センサスで見るペルー社会（4）」に関して、郵送した印刷版と最初の Web 掲載版が異なっていました。決定版は、印刷版の 8 頁左欄の「表 8 に示した通り、ナティバ共同体で日常的に使われている言語のトップはケチュア語で、全体の 68.9%、次がスペイン語の 21.0%、そして 3 番目がアイマラ語の 9.4%でした」の部分を削除したものととなります。現在の Web 版はすでに修正済みです。お詫びとともに訂正させていただきます。

エクアドルの国内武力紛争事態に見られるように、ナルコ経済は LA の隅々まで浸透している。メキシコの麻薬カルテルは、多国籍企業としてコスタリカやウルグアイなど「平和な国」でも営業している。治安が劇的に改善したエルサルバドルのブケレ大統領は釈放後に行方不明になった犯罪集団のボスの捜索（処分？）をハリスコ新世代カルテルに頼んだという噂すら流れている。

小林 致広

次回の印刷作業は東京で、2024 年 5 月 11 日（土）

発送作業は関西で、2024 年 5 月 18 日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 186 2023 年エクアドル大統領選挙、その混乱の中で	Vol. 183 いのちの踊り ビオダンサ
Vol. 185 コロンビア左派政権樹立から一年、終わらない戦争	Vol. 182 「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？
Vol. 184 滞在と移動のプロセス メキシコ・グアテマラ国境の事例	Vol. 181 コロンビア大統領選挙 依然続く紛争の現場から
	Vol. 180 ハイチ共和国はどんな国？

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます
メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください
メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています

会員の種類

☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆賛助会員：年 10,000 円（一口）総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆購読会員：年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒678-0001

兵庫県相生市山手 2-502-1 大西方

お問い合わせは、郵便、もしくは e-mail で
お願いします。

ホームページ：<http://www.jca.apc.org/recom>
<https://recom.r-lab.info>

e-mail：recom@jca.apc.org

Facebook：<https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座：00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム口座 123 万 0,659 円

グアテマラ基金口座 60 万 7,351 円
(2024 年 2 月現在)

そんりさ (SONRISA) 187 号

2024 年 2 月 18 日発行

日本ラテンアメリカ協力

ネットワーク (RECOM)

定価 400 円